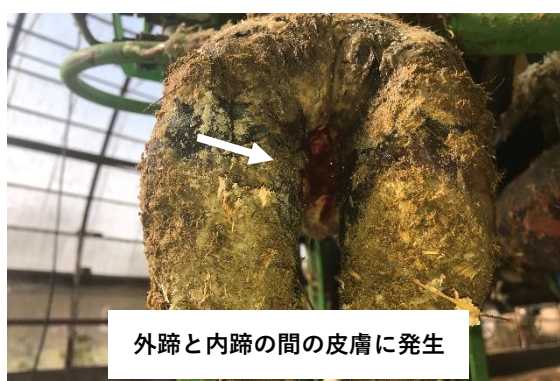


## あしよろ・ハードサポート通信

紅葉の時期も終わり、冬の足音が聞こえる季節となりました。さて、先月号では蹄の角質病変である蹄底潰瘍と白帯病について触れましたが、今回はいわゆる「ツメ」ではない部分の「蹄病」である趾間病変と趾皮膚炎（DD）についての話題です。

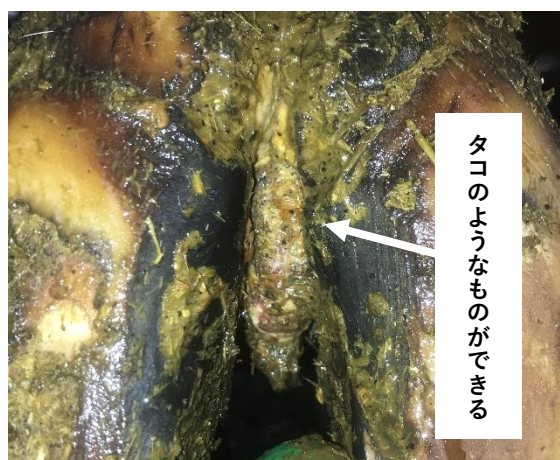
### ◆ 趾間フレグモーネ

趾間フレグモーネは趾間フランとも呼ばれており、外蹄と内蹄の隙間部分である趾間の病変です。趾間フレグモーネの発生は趾間の皮膚にできた傷から壊死桿菌という細菌が侵入することが原因であり、皮下組織の化膿や壊死が起こります。病状が進行すると牛にとって強い痛みを感じるものとなり、重度の跛行や採食量の減少、発熱、および起立不能に至るケースもあります。趾間フレグモーネが発生した際は速やかに獣医さんへ連絡し、抗生物質の全身投与などの処置を行ってもらうことが治癒に効果的です。予防としては趾間に傷を作らないことであり、放牧地への通路およびパドックの泥濘によって細かな砂利が趾間へ突き刺さることなどを防止しましょう。



### ◆ 趾間過形成

趾間過形成は趾間に硬いタコのようなものが過剰に形成された状態のことを言います。趾間過形成の原因は趾間の皮膚への慢性的な刺激であり、趾間への汚物の付着や外蹄と内蹄の負重バランスが崩れているときに発生しやすくなります。過形成部分が大きくなるに従って牛は痛みを感じるようになり、跛行が強まります。また重度になると挙肢しなくても趾間に過形成部分が見えるようになります。過形成部分が趾間に収まらないほど大きくなってしまった場合は痛みがより強くなり、前述の趾間フレグモーネや後述の趾皮膚炎の原因にもなりますので過形成部分の切除が必要となります。この場合も獣医さんとよく相談して処置を行ってください。



### ◆ 趾皮膚炎（DD：Digital Dermatitis）

趾皮膚炎はトレポネーマ属菌によって起こる皮膚炎であり、後肢に好発します。特にフリーストール飼養やフリーバーン飼養では罹患牛から他の牛へ感染が拡大することがあります。病状が進行するに従って牛が感じる痛みも強くなり、前述の趾間病変と同様に乳生産面や繁殖面に悪影響を及ぼすリスクが高まります。

趾皮膚炎が発生した場合は患部を洗浄してから薬剤の塗布や、獣医さんと相談のもと特定の抗生物質を塗布することで治癒しやすくなります。趾皮膚炎の予防としては蹄浴の実施や、可能な限り糞尿などの汚れが付着しないように乾燥した清潔な環境で飼養すること、好発部位への薬剤スプレー塗布を行うことが挙げられます。

蹄浴を実施する際は少なくとも二週間に一度、三日連続で行うことをおすすめします。趾皮膚炎の発生割合が高い場合は毎週行いましょう。また厳寒期は凍結のリスクがあるため蹄浴を休止することもあります。その間に趾皮膚炎の発生が多くなってしまう可能性があるため、排水面を考慮しながら厳寒期は不凍液を使用する蹄浴実施も検討しましょう。



「かかと」の部分に発生しやすい



重度の趾皮膚炎



蹄浴は年間通して行うことが望ましい

### ◆ 「蹄病」は常に予防と早期処置が何よりも大切

蹄病は牛にとって痛みを伴うものですが、特に趾間の病変は牛にとって痛みの度合いが強く、ある牧場のデータでは趾間病変に罹患した牛の空胎日数が延長する傾向にありました。牛群の良好な健康状態や繁殖成績、乳生産を保つためには、どの種類の蹄病が多いのかを見極めて予防策を打ち、跛行や肢の腫れなど牛からのサインを放置せずに速やかに処置を行うことが大切です。軽度の蹄病であれば酪農家さんご自身で処置を行うことも可能であり、牧場において蹄病予防への意識向上にも繋がります。ぜひご自身での蹄処置チャレンジをご検討ください。



移動脱着式の保定柵

酪農家さんご自身で処置を行うことも可能であり、牧場において蹄病予防への意識向上にも繋がります。ぜひご自身での蹄処置チャレンジをご検討ください。（市川雷太）